

「重症心身障害の方のコミュニケーション支援の考察と今後の取り組み（Ⅱ）」

・・・タブレットの利用について・・・

今年度から我々の事業所（アドヴァンス）では、障害の重い人たちの意思の表出を汲み取るためにタブレット機器の利用に着手している。前号の「重症心身障害者の方のコミュニケーション支援の考察と今後の取り組み（Ⅰ）」で紹介されたように、支援の場では互いのコミュニケーションや意思の疎通は欠かせない。しかし、障害の重い人が指や首の僅かな動きで全身をふりしぼるように表した内容を、支援者側の思い込みでその意思を理解したと勘違いしていることも少なくない。意思が表出されあるいは意思を表出しようとしているのに、支援者がそれを汲み取れないということが多々ある。

そういった問題を解決するために、これまでは写真や絵カードを使って本人の意思決定を支援しようとしてきた。利用者の思いや意思はどこにあるのかを見極めることは重要な課題だ。加えて、我々支援者側が提案する活動メニューだけで良いのか？そこには、本人の思い、期待や願いが反映されているのか？ということも見直しが必要な課題であった。そのような課題に対応するために、今年度からタブレット機器を利用して本人の意思を多角的に様々な方法によって汲み取ることを試みている。

タブレットを導入してからの取り組みでは、視覚や聴覚を使って意思を表出することが出来るアプリを活用している。本人の眼球の動きを捉えその動きを機器が認識することで眼球の動きだけで意思の表示ができるといったアプリだ。また、現在、トーキングエイドを使用している方にも実際に使用してもらうなど、様々な障害特性ごとにアプリを変えて活用できるのも利点の一つになる。さらには、今まで絵カードや簡単な言語でしか情報を提供できなかった自閉傾向の方へも動画や音など様々なアイテムを活用して、本人が記憶していくまでの検証もしている。

タブレットは、意思の表出場面のみで活用されているわけではなく、音声を変換しての紙芝居を行う活動場面などの中でも力を発揮している。当初は、何が起こったかと思議そうな反応を示していたが、スタッフが入れ代わりで紙芝居を行ったところ、不思議そうな顔をしていた利用者さんたちの表情が次第に笑顔へと変わった。また、ピアノ機能を持ったアプリでも、始めは画面に触れる事に戸惑っていた方も、自分の動作から出る音を楽しみながら演奏し始めた。一つのタブレットから今までには見られなかったさまざまな面がひき出されこの機器の大きな可能性を感じるようになった。

しかし、例えばトーキングエイドはタッチセンサーで枠が無いので誤押しも多いなどのハード面の使いづらさがあったり、アプリが高価なうえに体験版が無く実際にそのアプリが使えるかどうかは購入するまでわからないなど今後改善を期待したい点も数多い。このツールを受け入れ、使用できるまではかなりの時間を要する方も当然いる。しかし、タブレットやアプリが障害を持った人のためだけに作られているわけではないので、改善はむしろ専門家としての自分たちの工夫で解決すべきことでもあるのかもしれない。

重症心身障害者の方だけに限らず、こうした機器がコミュニケーションの道具として認識されておらず、将来に可能性をつなぐ使い方を工夫し、タブレットの必要性や有効な活用法を見つけ出すことを通して、これを一つの道具としてバラエティに富んだ生活をコーディネートしていくことを重視していきたい。便利なツールの活用でその人の生活がより豊かに、夢の実現や、望んだ生活に一步でも近づければと考えながらタブレットと向きあう昨今である。

アドヴァンス支援員 吉田 純也